

# 時評

佐藤洋一郎

総合地球環境学  
研究所副所長・教授



酒酔い運転による残酷な事件が多発している。酒酔い運転による検挙数は減っているのに、酒酔い殺人運転ともいえるべきような事件はなぜ起きるのだろうか。誤解を恐れずに書くならば、その答えは「厳罰放任主義」にあると思う。こういう言葉が

あるかどうかは知らないが、要するに事件を起した本人を厳罰に処してそれで済ませたいとする今のやり方のことをそう呼ぶでしょう。

一般に、多くの社会で、ルールを破ったときの罰則をきつくと、ルール破りの数は減るが手口は悪質に、そして陰湿になる。そのことは大学のカンニ

## 酒酔い運転防止

ンク(受験時の不正行為)を考  
えてもそうだ。カンニクを厳  
しく処すると、数は減るが一部  
に悪質なものが残る。それを防  
止しようとさらに罰則を強化す  
ると、手口はさらに巧妙化し、  
しかも「たかがカンニク」と  
笑って済ませないような陰湿な  
それが登場する。「毒を食らわ

いようにするなどのアイデアも  
あるようだが、それも確かに有  
効だろう。加えて、酒酔い運転  
を意図した瞬間苦痛を伴うよう  
な仕掛けを作るのもよいと思っ  
ている。例えば、呼気にアルコ  
ールを含んだままエンジンをオ  
ンにするとかクラクションが鳴り  
続ける、などだ。これは周囲に

## 殺伐とした社会ただそう

ば」という心理が、結果として  
犯行をいっそう凶悪化させると  
いうわけだ。

それこそ命をかけて逃走するで  
あろうことは容易に想像でき  
る。厳罰では酒酔い運転を減ら  
すことはできても、それだけで

ることにのみなり、心理的な抑止  
力が期待できるように思われ  
る。とにかく、厳罰を課しただ  
けであと何もしなければ、より  
凶悪な殺人運転を誘発しかねな  
いことは明らかだ。そして根本

人間が虫をやっつけようとすれ  
ばするほど、凶暴で手ごわい害  
虫が出現してきたことがわか  
る。人間は殺虫剤を開発するな  
どして対抗してきたが、殺虫剤

はできない。  
ならばどうすればよいか。運  
転者がハンドルをにぎる際、呼  
気をチェックしてアルコールを  
検知すればエンジンがかからな

いことでは、命を軽んじる  
今の殺伐とした社会をただして  
ゆくことが必要なのだと思う。

どして対抗してきたが、殺虫剤

検知すればエンジンがかからな

いことでは、命を軽んじる  
今の殺伐とした社会をただして  
ゆくことが必要なのだと思う。

◇さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究  
科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現  
職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)  
「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。

執筆者略歴